

教育社会学におけるインタビューの方法

—「考え方」と「進め方」を中心に—

芝 野 淳 一

0. 石を投げればインタビューに当たる

本稿は、筆者が専門とする「教育社会学」に興味があり、なおかつインタビューを用いて卒業研究に取り組もうとする学生に、その「考え方」と「進め方」を解説するものである¹。

インタビューとは、人と対話しながら情報を集める研究方法である。教育社会学の分野において、インタビューは最も頻繁に用いられる方法である。例えば、日本教育社会学会が発行する『教育社会学研究』（最先端の教育社会学の論文が読める学術雑誌）では、2000年から2017年に掲載された質的研究の7割以上がインタビューを使っていたようだ（間山ほか2018）。まさに、「石を投げればインタビューに当たる」状態である。かくいう筆者も、これまで国内外のさまざまなフィールドで調査を行ってきたが、研究成果の大半がそこで出会った人々にインタビューした内容をまとめたものである（芝野2022など）。

他の分野でもインタビューは人気がある。そのため、これまで膨大な数の参考書が出版されている。研究の分野や書籍のテーマによって多少テキストは違うが、どの本にも似たようなことが書かれている。最初に断って

¹ 本稿は2023年度末に出版されるはずだった教育社会学に関する教科書の一章である。諸事情により書籍の出版は中止されたが、多くの人がこの原稿の執筆に協力して下さったこともあり、「お蔵入り」するのではなく公開するほうがよいと判断した。

おくが、本稿にも他の参考書と大きく異なることは記されていない。文末の「文献紹介」に役立ちそうな参考書をあげておいたので、そちらを読んでもらってもよい。

本稿の流れは次のとおりである。まず、インタビューの特徴（1節）とタイプ（2節）を整理する。その上で、インタビューの進め方を解説する（3節）。最後に、インタビューがもつ魅力について述べる（4節）。本稿を通してインタビューに少しでも興味をもってもらえれば幸いである。

1. インタビューの考え方

(1) インタビューの特徴

まず、インタビューがどのような研究方法なのかを説明する。フィールドワークとの違いに注目すると、次の3つの特徴がみえてくる。

第一に、「人」へのアプローチを重視することである。フィールドワークは場や集団に焦点を当てるが、インタビューは個別具体的な人に目を向ける。「(現場で) 何が起きているか」よりも「(人が) 何を経験しているか」を知ることのほうに関心が寄せられる。研究分野や分析手法によって異なる部分もあるが、インタビューを用いた研究の多くは人々の経験に接近することを目指している。

第二に、「二人称」の関係性を大切にすることである。フィールドワークは現場における人間関係の中で取り組まれるが、インタビューは「私とあなた」という関係において営まれる。多くの場合、任意に設定された場所において対面状況で行われ、人と人との直接的な対話が展開される。

第三に、「聞くこと」に注力することである。フィールドワークはどちらかというと「見ること」を生業にしているが、インタビューは自分の目の前にいる人の声を「聞くこと」にこだわりをもつ。そのため、人の行動を観察することより、その行動の意味（＝行為）を理解することに力点が置かれる。特に、「聞くこと」の中でも「たずねること（訊く）」や「受け止め、理解すること（聴く）」といった能動的な態度が求められる。

ただし、フィールドワークとインタビューは対立的な研究方法ではない。両者は補完的であり、また連続性をもっている（フィールドワーク中のインタビュー、インタビューをきっかけとしたフィールドワークなど）²。さらに、同じインタビュー研究であっても、人へのアプローチの仕方、人との距離のとり方、人の声の聞き方は多様であり、一括りにはできない。

(2) インタビューの目的

次に、インタビューの目的を3つにわけて述べる。なお、教育社会学におけるインタビュー研究のスタンスはさまざまであり、下記の内容が絶対的に正しいわけではない。インタビューを用いて研究する際の、ひとつの考え方として参考にしてほしい。

① 他者の現実を理解する

教育社会学におけるインタビュー研究は多岐にわたるが、他の教育研究と比べ、声をあげることができない、あるいは声をあげても聞いてもらえないマイノリティの子どもや若者の経験に接近するものが多い³。その目的は、社会で周辺的な立場に置かれる人々の現実を理解することにある⁴。つまり、インタビューは他者がどのような現実を生きているか、またその現実をどのように理解しているかを知るための方法なのである。

インタビューでは、さまざまな「生きづらさ」（貴戸 2022）が語られる場合もあれば、逆境を跳ね除ける生き生きとした語りと出会うこともある。大切なのは、そうした語りを自身の基準で価値づけしないことである。インタビューの目的は、他者を評価したり診断したりすることではない⁵。

² フィールドワークの過程で出会った人々と深い関係を築きながら聞き取りを実施する「エスノグラフィック・インタビュー」（O'Reilly 2012）という手法もある。教育社会学の分野では、芝野（2022）や野村（2023）がこの手法を用いている。

³ 無論、マイノリティの子ども・若者を取り巻く教師、保護者、支援者なども当該問題の当事者である。かれらの声を聞くことも、マイノリティの教育問題を多角的に解明するために重要である。

⁴ 当事者が当事者を研究する場合など、他者（被調査者）と自己（調査者）の距離が近いこともある。

⁵ 筆者の経験でいうと、勉強熱心な人ほど語られたことと理論との距離に戸惑い、正義感の強

他者の現実を理解するためには、語られた経験にどっぷり浸かり、自分のことを考えるのと同じようにその人のことを考えなければならない。

一方で、インタビューは語る側にとっても貴重な経験となる。語り手にとってインタビューは、「自分のことばを受け止めてもらったという、確かな出来事」(鷺田 2015, p.14)である。それは、自ら語るができない、また、語る機会が与えられないマイノリティの人々にとって特に大きな意味をもつ。インタビューは、その聞き取りがなければ関心が向けられなかった声に力を与える実践でもあるのだ(バック 2014)。

② 部分的な真実を知る

ただし、簡単に他者を理解できると考えてはならない。そもそも、私たちは他者と全く同じ現実を生きることはできない。その意味では、自分とは異なる人の現実を完全に理解することは誰にもできないのである。無論、インタビューしたからといって、その人のことをわかったように語ることは避けなければならない。

矛盾するようだが、調査という営みは他者の理解をさらに難しくする。なぜなら、それが始まった瞬間、「私とあなた」は「調べる側と調べられる側」という非対称な関係性に埋め込まれてしまうからである。本来、他者のことを聞いたり書いたりできる権利など、誰にもないはずだ。しかし、調査という場においては、「学問」や「研究」という名目のもと、なぜかその権利が一時的あるいは部分的に与えられてしまう。調査者は何らかの苦悩や困難を経験した人々を語らせ、その語りを自分の関心にあわせて編集し、公開する。つまり、調査者は特権的な立場から他者の声を聞いているのである。したがって、調査という営みは「それがどんなに『良心的』なものでも、ひとの生活を土足で踏み荒らすようなおこない」(岸 2016, p.165)であり、暴力性を孕んでいることを常に自覚する必要がある。

い人ほど自身の思想信条と異なる意見に対して批判的になる。自身の学問的・倫理的正しさは、他者の声に耳を傾けるために活用してほしい。

結局のところ、インタビューによって見出された他者の現実、調査者が自身の関心のもと切り取ったものでしかない。聞かれなかった、書かれなかった現実のほうが明らかに多い。調査で得られた知見は絶対的な真実ではなく、どこまでいっても部分的な真実なのである。しかし、それでも他者の現実に近づくことはできる。裏を返せば、自分が真摯に耳を傾け、記述した他者の経験は、部分的には真実なのである（バック 2014）。部分的な真実を知ることは、インタビューに限らず、質的研究において重要な目的である。

③ 異なる教育のあり方を構想する

インタビューの目的は、他者の経験を聞き集めることだけではない。個人が生きる現実を通して、社会に生じる教育問題を発見したり、その解決の糸口を探ったりすることも大切な目的である。このような、個人的な問題と社会的な問題を結びつける力を「社会学的想像力」（ミルズ 2017）と呼ぶ。教育社会学的なインタビューが目指すのは、この社会学的想像力を駆使しながら異なる教育のあり方を構想することである。

もっとも、マイノリティの子どもや若者が直面する問題の背景には、格差や排除を生み出す社会構造の問題が横たわっている。例えば、移民の子どもや若者の生きづらさの原因は、顕在化しやすい「言語」や「文化」の問題をみるだけではわからない。その背景には、日本の社会政策、グローバルな労働市場、植民地主義の歴史などマクロな要因が複雑に絡み合っている。したがって、子どもや若者の小さな声を大きな社会的文脈との関係において読み解いていくことが必要となる。

多様な他者の現実を通して既存の教育を問い直すこと。それを踏まえて、誰もが尊重される公正な教育のあり方を考えていくこと。社会学的想像力を活かしたインタビューは、これらを実行するための資源となり得るのである。

問わず語りや雑談などが中心となる。会話の主導権はどちらかというに対象者側にあるといえる。非構造化インタビューは「知らないことを教えてもらう」ことを重視するため、生活史調査など個人の人生経験に迫る研究に向いている⁶。なお、フィールドワークの一環として実施されるインフォーマルなインタビュー（立ち話や問わず語りなども含む）も非構造化の形をとることが多い（佐藤 2015）。

(3) 半構造化インタビュー

研究内容や目的に合わせて質問リストを準備するが、状況に応じて内容や順番を柔軟に変更しながら行うインタビュー。質問の仕方は構造化インタビューほど固定的でなく、非構造化インタビューほど流動的でない。調査者は事前に用意した質問項目を参照しつつ、オープンエンドな質問を繰り出しながら対象者の自由な語りを引き出す。会話の主導権はどちらかという調査者にあるが、対象者の自由度も確保されていることが特徴である。半構造化インタビューは、「知りたいことを聞き出す」ことを目的とするものから「知らないことを教えてもらう」ことを重視するものまで幅広い。そのため、さまざまな研究に活用されている。

(4) 半構造化がちょうどいい

初めてインタビューに取り組む人には、半構造化インタビューをおすすめする。構造化インタビューは入念な準備が必要だが、高度な聞き取りの技術は必要ないため、初心者でも実行しやすい。ただし、調査者が想定した範囲のことしか聞き出せないため、対象者の経験を深く知るには物足りない。一方、インタビューの行方を相手に委ねる非構造化インタビューは職人芸的な技術がいるため、ある程度の場数を踏む必要がある。

その点、半構造化インタビューは質問内容がゆるやかに決まっているた

⁶ 生活史調査について詳しく知りたい人は、岸ほか（2016）の3章を参照のこと。

め大崩れしにくい。また、オープンエンドな質問を意識することで、ある程度自由に経験を話してもらえる。対象者の回答に応じて柔軟に質問を繰り返すのは簡単ではないが、事前にフォローアップ質問を考えておけば、そこまで難しくはない。調査の難易度は「少し挑戦する」くらいがいい。これから調査を計画する人は、まずは半構造化を参考にしてほしい⁷。

3. インタビューの進め方

ここから、インタビューの進め方について解説する。具体的には、半構造化インタビューを行うことを想定し、計画・準備から実施・報告までの手順を解説する。本節の内容は、あくまでもひとつの例である。調査の経験は、誰が、いつ、どこで、何を、どのようにやるかによって異なる。調査中に予想外の出来事に遭遇することも多々ある。質的研究のオリジナリティは、そのような個性や偶発性から生み出される。大まかな道筋は示すが、ゴール（調査の完遂）への行き方は実際にやっていく中で探してほしい。

(1) インタビューの計画・準備

① 調査計画を立てる

まず、調査の時期、対象、内容を明確にしておこう。これは調査の大まかな指針であり、計画通りに進める必要はない。

時期：卒業研究は長くても1年半ほどしか取り組む時間がない。論文提出日から逆算してスケジュールを立てよう。多くの場合、就職活動と並行して研究を進めることになるため、特に工夫が必要である。調査期間は1ヶ月から2ヶ月で設定するとよいだろう。

対象：誰に何名インタビューするかを決める。詳しすぎると協力者を見

⁷ 複数の人と同時に行うグループ・インタビューという方法もある。グループ・インタビューは、調査者が会話の流れを制御する構造化されたものから、集まった人に自由な会話を促す構造化されていないものまで幅広い。ただし、多かれ少なかれ、調査者はインタビュー全体をうまくガイドしなければならない。そのため、初心者にはやや難易度が高い。

つけられないので、属性や特徴を大まかに設定しておく。人数に決まりはないが、5名から10名に深い聞き取りをすることをおすすめする。インタビューに厚みがあり、研究テーマに合致した内容であれば、1人でも問題ない。インタビューは数ではなく質であることを忘れないでほしい。

内容：何を聞くか考える。リサーチ・クエスチョン（研究の問い）にもとづいて、インタビューの核となる質問を3点から5点あげればよい。ポイントは、時系列に沿った連続性のある質問を立てることである。例えば、外国人留学生の進路選択について調べる場合、「1. どのような経緯で日本の大学を選択したか（来日の経緯）」「2. 進学後、どのような大学生活を送っているか（進学後の状況）」「3. 今後、どのような進路を考えているか（卒業後の展望）」のように設定するとよい。

② 質問リストを作る

質問リストは半構造化インタビューをガイドするためのものだが、作り込みすぎるとリストに縛られて柔軟な聞き取りができなくなるため、注意が必要である。

質問リストの構成は次の通りである。まず、対象者の基本情報に関する項目を立てる。次に、調査計画で設定した質問内容に合わせて大項目を立て、さらにそれらを具体的にした中項目を設ける。インタビューでは、この大項目と中項目に沿って質問する。これらに加え、中項目を詳細にたずねる小項目を設定し、インタビューの状況をみながら必要に応じて活用する。このようなフォローアップ質問は、相手の語りを膨らませるときに役立つ。質問の形式は、「なぜ、どのように、どのような」を問いかけるオープンエンドなものを設定する。そうすることで、相手に自身の経験を比較的自由に話してもらえる。

図2は質問リストのイメージである。先にあげた外国人留学生の進路選択の調査を例にしている。なお、インタビューを重ねる中で相手が答えづらい質問や付け加えたようなよい質問がわかってくるので、気づいた時点

で適宜修正を加えよう。

外国人留学生の進路選択に関する調査 質 問 リ ス ト	
0. 対象者の基本情報	
<ul style="list-style-type: none"> ・性別、年齢、出身地 ・現在の大学・学部（専攻）・学年 	
1. 来日の経緯：どのような経緯で日本の大学を選択したか → 大項目	
1.1 なぜ、日本の大学に進学しようと考えたか → 中項目	
<ul style="list-style-type: none"> ・小学校、中学校、高校での家庭環境や学校経験どのようなものだったか → 小項目 ・何がきっかけだったか、他の選択肢もあったか ・周りに日本の大学に進学した人はいたか、また、親や学校の先生は協力的であったか 	
1.2 どのように現在の大学に進学したか	
<ul style="list-style-type: none"> ・なぜ、現在の大学を選択したか ・どのようなルートをとって現在の大学に進学したか（現地の高校から直接進学したか、日本語学校や留学生別科を経由したかなど） ・なぜ、そのようなルートをとったか（何がきっかけだったか、他の選択肢もあったか） ・進学にあたってどのような困難に直面したか、それをどのように乗り越えたか 	
2. 進学後の状況：どのような大学生活を送っているか	
2.1 学習状況はどのようなものか	
<ul style="list-style-type: none"> ・どのような学習・研究に取り組んでいるか（専門分野、資格取得、ゼミ活動、課外活動など。そうした学習・研究に取り組んでいる理由など） ・学習・研究の面で苦労していることはあるか（具体的な悩み、サポートしてくれる人や組織の有無など） 	
2.2 交友関係はどのようなものか	
<ul style="list-style-type: none"> ・どのような学生と交流することが多いか（日本人との交流、留学生同士の交流、交流の内容など） ・学外での交友関係はどのようなものか（バイト先、ボランティア先、他大学など） ・交友関係で苦労していることはあるか（なぜ、どのようなことに苦労しているかなど） 	
2.3 生活状況はどのようなものか	
<ul style="list-style-type: none"> ・日本の文化に適應できているか（スムーズに適應できているか、困難に直面しているか、など） ・出身地との関係はどのようなものか（関係は続いているか、誰にどのくらいの頻度で連絡を取っているか、何のために連絡を取っているか、など） 	
3. 卒業後の展望：今後、どのような進路を考えているか	
3.1 日本での留学経験は自分の人生にとってどのようなものだったか	
<ul style="list-style-type: none"> ・ポジティブよりかネガティブよりか（どのような側面がポジ/ネガなのか） ・日本での留学経験は今後の進路選択にどのように影響を与えているか 	
3.2 具体的に、どのような道に進む予定か（複合的・可変的な場合もあるので、それにも言及する）	
<ul style="list-style-type: none"> ・就職の場合：どの国で就職する予定か、どのような業種か、なぜ、そのような選択をするのか ・進学の場合：どの国に進学する予定か、どのような分野か、なぜ、そのような選択をするのか ・迷っている場合：なぜ、どのように迷っているのか 	

図 2：質問リストの例⁸

⁸ 実際に筆者のゼミの学生が作成した質問リストを加工したものである。

③ 同意書を作る

インタビューは、必ず対象者の事前承諾（インフォームド・コンセント）を得てから行う。事前承諾に係る説明は、同意書を示しつつ口頭で実施することが望ましい。難しい場合は、いずれかでよい。重要なのは、調査についての正確な情報を相手に伝えることである。嘘をついて調査することは、明確な研究倫理違反である。

同意書には、研究題目、調査の内容・目的・方法、協力の自由（任意性）、個人情報保護の方針、結果の公表の方法、問い合わせ先などを記載する。対象者の背景によって同意書の形式に工夫が求められる場合がある（日本語が母語ではない人にルビ振りや翻訳をするなど）。また、未成年を対象とする場合は保護者に同意を得る必要がある。

説明が終わったら、調査協力への同意を確認し、サインをもらう。相手が自筆でサインすることが難しい場合は、任意の関係者に代筆をお願いする。同意書は調査者用と協力者用を1部ずつ用意し、両者が同じものを保管しておく。

ただし、同意書にサインを得たからといって何をしてもよいわけではない。倫理的問題は、聞き取りの途中や終了後にも生じる。その点で、筆者は、質的調査の事前承諾は形式的なものでしかないと考えている。調査終了後にも続くような倫理問題を、調査が始まる前に解決してしまうことなど不可能である。あくまでも、研究倫理は対象者を調査の暴力から守るために存在する。そのことを忘れて、同意書は調査する側の暴力性を正当化する道具となってしまう。引き続き、調査に協力してもらう相手に誠実に向き合うことが求められる。

④ 協力者を探す

最後に、インタビューに協力してくれる人を見つけよう。インタビューはアンケート調査のように対象者を無作為に抽出する必要はない。自分の身近な人をたよりに協力者を見つけるのが一般的である。学生の場合、ボ

ランティア先、実習先、バイト先などで見つけるか、指導教員や知り合いに紹介してもらうのがよいだろう。協力者が見つければ、数珠つなぎに他の協力者にアクセスできることが多いので、「最初の一步」をクリアすることが肝心である。

(2) インタビューの実施・報告

① アポを取る

協力者が見つかったら、インタビューのアポを取ろう。簡単な依頼文と質問内容を送り、実施日時と場所を決める。必ず相手の都合を優先して調整する。伝達ミスを減らすため、記録が残るメールでやりとりするのがよい。相手の職場や自宅などで実施する場合は、丁寧をお願いする。任意の場所で行う場合は、相手に要望を聞いて適当な場所を選ぶ。最近ではオンライン・ツールを使ってインタビューすることも珍しくない。アカウントの設定や送信などをミスしないよう注意しよう。なお、相手が約束を忘れないように、実施日の3日から5日前に確認メールを送っておくとよい。

② 持ち物を確認する

当日の持ち物として、質問リスト、同意書、録音用のICレコーダー⁹、メモ帳を準備しておく。調査に協力してもらうお礼として手土産を用意しておくこと丁寧である。ICレコーダーは聞き取りの内容を詳細に記録するための道具なので、絶対に忘れないようにする。不測の事態に備え、予備のレコーダーと電池を携帯しておくことよい。メモ帳は、インタビュー中に気づいたことを書き留めるときや、録音を断られた場合に活用する。

⁹ ICレコーダーは安価なものがあるので探してみよう。スマートフォンに内蔵されている録音機能は便利だが、オンライン上へのデータ流出のリスクがあるため、セキュリティの観点からおすすめできない。

③ 話を聞く

インタビュー当日は、少し早めに集合場所に行き、待機しておく。協力者が到着したら、挨拶をしてインタビューを開始する。45分から2時間を目安に実施すると、相手の時間を長く拘束することなく、ある程度厚みのある聞き取りができる（O'Reilly 2012）。インタビューが始まったら、その場の流れに身をまかせ、相手との会話を全力で楽しもう。参考までに、以下に筆者なりのアドバイスを記しておく¹⁰。

すぐ本題に入らない：まずは当たり障りのない話をして、お互いの肩の力が抜けてきたらインタビューに入る（今日はどうやって来られましたか？など）。開始前に、改めて調査の趣旨を確認し、答えたくない質問には答える必要がないことを伝える。同意書の確認などが終わっていない場合は、ここで完了させておく。

録音を忘れない：インタビューは必ず許可をもらってから録音すること。理由を説明すれば断られることは滅多にない。途中で録音を止めることができる、録音データは研究終了後に削除する、などを伝えておく。録音を断られたらメモをとり、帰宅後すぐに清書しておこう。ただし、メモを取るのに集中しすぎると対話の流れを遮ってしまうので注意しよう。

経験を聞く：インタビューは、具体的な経験に耳を傾けることで厚みや深さが増す。事実確認だけで終わらないように注意しよう（「はい／いいえ」「あった／なかった」など）。オープンエンドな質問を心がけ（「どのような経験をしたのか」「そのときどのような気持ちだったか」など）、事前に用意したフォローアップ質問を織り交ぜるとよい。また、自分の経験などを話すのも効果的である。しゃべりすぎは禁物だが、適度に自己開示しながら相手の心を開いていこう。間違っても、相手の話を遮るようなことはしないように。

¹⁰ 他にも、岸（2016）に聞き方の技法がわかりやすく書かれているので参考にしてほしい。洋書が読める人は、O'Reilly（2012）の6章も参考にしてほしい。両者を合わせて読むと日本と海外の「話の聞き方」の共通点と相違点がみえてくるだろう。

五感で聞く：インタビューで得られる情報は音声だけではない。相手の表情、場所の風景、部屋の匂い、周りの雑音など、インタビューの場はたくさんさんの情報で溢れかえっている。例えば、筆者は聴力が弱いため、「目」で聞くことを大切にしている。相手の口の動きや仕草はもちろんのこと、その人の職場や自宅で行うときは家具の配置や飾られているモノ（写真や絵など）にも目を向ける。こうした情報は、相手の経験を理解する上で重要な役割を果たす。ぜひ、五感をフルに活用してインタビューに臨んでほしい。

脱線も聞く：インタビューでは、よく話が外れる。脱線話は無理に遮らず、相手の気が済むまで話してもらおう。その時は研究に関係のない話だと思っけていても、後で聞き返すと、前後の語りを理解するのに重要な情報が詰まっていることがある。心配しなくても脱線話はいつか終わる。その時が来たら、もとのルールに乗り直せばよい。

最後まで聞く：インタビューが終了し、テープを切った後、少し雑談して解散することになる。その雑談にも重要な内容が含まれていることがある。最後まで気を抜かず相手の話を聞き続けよう。気づいたことは、解散後にメモするとよい。なお、帰宅後、必ずインタビュー協力者にお礼の連絡をすること。

④ スクリプトを作る

録音したインタビューは、すぐに文字起こしをしよう。文字起こしをした文書のことをスクリプトと呼ぶ。スクリプトはアンケート調査でいうデータセットのようなものなので、この作業はとても重要である。

インタビューの会話は、一語一句すべて書き起こす。分析に必要な場合は、会話の合間に入る「えー」や「あー」などは省略してもよい。ただし、会話の間合い自体を研究対象とする場合は省略しない。話者の感情は重要な情報なので、(笑)などで記しておくるとよい。文字起こしは骨の折れる作業だが、無料の文字起こしアプリを活用すると少しは負担が軽減さ

れるだろう。文書の冒頭には、必ず対象者の名前、属性、インタビューの日時と場所、実施時間を記しておこう。参考までに、図3にスクリプトのイメージを載せておく。

スクリプト作成後、インタビューの簡単なまとめ（対象者のプロフィールやリサーチ・クエスチョンに対応する回答など）をExcelなどに入力おくと、分析のときに便利である。また、インタビューで取ったメモも貴重な情報なので、必ずWordなどに清書しておこう。

対象者：Aさん（女性・中国からの留学生・△△大学〇〇学部3年生）

日時：2023年9月20日（水） 15:00~16:15

場所：××駅前のスターバックス・コーヒー

実施時間：75分00秒

私：今からインタビューを行います。よろしくお願いします。

A：よろしくお願いします。

私：インタビューは録音しても大丈夫ですか？

A：大丈夫ですよ（笑）

私：この録音は卒業論文を書いたらすぐに消します。答えたくない質問があったら答えなくて大丈夫です。

A：はい。

私：それと名前や個人情報は仮名を使います。

A：はい。

私：このインタビューを何のために行うかという、先ほども説明しましたが、外国からの留学生がなぜ、どのように進学したのかを調べていて、それでインタビューをお願いしました。

A：はい。

私：じゃあ始めますね。まず、プロフィールについて…

A：はい。

私：年齢はいくつですか？

A：21歳です。

私：大学と学部を教えてください。

A：△△大学の〇〇学部です。いま3年生。

私：ありがとうございます。出身は中国ですよね、どの地方ですか？

A：四川省ですが、わかりますか？（笑）

私：はいはい、わかります、聞いたことがあります。Aさんの出身地のこと、また後で詳しく聞かせてもらいますね。で、いつから日本に来ましたか？

A：高校2年生から日本の高校に入った。そしてなんか直接日本の学生としてこの学校に卒業して、でも中国の卒業証明書も持っているんで、日本人の入学試験とか中国の、中国じゃなくて留学生の入学試験とか両方に参加することができますので…

私：留学生の試験と日本人向けの試験、両方を受けれるってことですか？

A：そう。留学試験に参加すれば大学の学費を減免することができますので、留学試験を選びました。

図3：スクリプトの例¹¹

¹¹ 実際に筆者のゼミの学生が作成したスクリプトを加工したものである。

⑤ 結果を報告する

インタビューの結果は、報告書や論文の形式にまとめて報告する。聞き取った人々の声を多くの人に伝えることも、調査者に与えられた大切な使命である。協力してもらった方々の顔を思い浮かべ、何度も語られた声に耳を傾けながら、気持ちを込めて書き上げよう。

ここでは、簡単にデータの分析と考察について説明しておく。ある程度の厚みをもったインタビュー・データを複雑に分析する必要はない。むしろ、鋭い理論で切り刻んでしまうと、せっかく語ってもらった内容が台無しになってしまう。分析は設定したリサーチ・クエスチョンに沿って整理する程度にとどめ、語られたことをできるだけ詳細に記述していこう。その際、スクリプトから「生の語り」を抜き出し、適所に挿入すると効果的である。先行研究の知見や理論は、そうした「生の語り」の意味や背景を解釈するために活用する。最後に、記述した人々の経験が既存の社会問題や教育問題とどう関連しているのかを考察しよう。1節で述べたように、個人的な経験を社会的な文脈に位置づけることは、教育社会学的なインタビュー研究の重要な仕事である。なお、インタビューの記述においては、匿名性を担保するなど、対象者のプライバシーを侵害しないよう細心の注意を払うことが必要である¹²。

原稿が完成したら、提出する前に、必ず協力者に確認してもらおう。言語の問題などで原稿の確認が難しい場合は、口頭で説明しながら確認をとる(要旨だけでも翻訳ソフトを使って当該言語に翻訳する)。協力者に関わる部分で削除や変更を求められた場合、綿密に話し合った上で対応する。

4. あなたにとってのインタビュー

本稿の最後に、インタビューがあなた自身にとっても重要な経験であることを伝えておきたい。少なくとも、インタビューは次の2つの機会を提

¹² 個人情報保護の観点から、必要に応じて、内容に支障がない範囲で情報の一部を加工するなどの手立てをとることもある。

供してくれる点で意義がある。

第一に、聞く力を養う機会である。あらゆる人が尊重される公正な社会をつくるには、多様な背景をもつ人同士の「対話」が必要である。対話は「話すこと」と「聞くこと」によって成り立つが、昨今の日本社会では前者のほうに価値が置かれることが多い（芝野 2022b）。自己表現を重視する「話すこと」ばかりに囚われてしまうと、他者理解に開かれた「聞くこと」が蔑ろにされ、建設的な対話が成立しなくなる。対話する力を養うには、話す力と同じように聞く力を鍛える必要がある。インタビューは、忘れられがちな聞く力を身につける最良の機会である。注意深く人の経験に耳を傾け、その人のことを真剣に考えることを通して、あなたの聞く力が育まれていくだろう。

第二に、新しい自分と出会う機会である。インタビューは、さまざまな人生にふれることのできる贅沢な時間である。そこで出会った生き方や考え方は、あなたの人生の意味や方向性を考える上でとても役立つ。重要なのは、インタビューで得た他者の生き方や考え方を踏まえて、あなたの中にある常識や価値観を問い直してみることである。そうすることで、自身のものの見方が少しずつ変わり、インタビューをする前とは違った視点から他者や社会について考えることができる。あなたが慣れ親しんだ身近な世界でさえ、違ったように見えてくるだろう。それは、新しい自分と出会うことにほかならない。異なる教育のあり方を構想するためには、まずはあなたが変わらなければならない。インタビューの醍醐味は、「この声が自分を変えてくれるかもしれない」と思えたときに味わえるだろう。

【文献紹介】

- ① 岸政彦・石岡丈昇・丸山里美, 2016, 『質的社会調査の方法－他者の合理性の理解社会学』有斐閣.

質的調査の方法論と技法を詳しく学びたい人におすすめ。フィールドワーク、参与観察、生活史の手法が解説されている。インタビューを通して他者の人生にどっ

ぷり浸かってみたい人は、生活史の章を読んでみよう。

- ② 秋田喜代美・藤江康彦編, 2019, 『これからの質的研究方法 - 15の事例にみる学校教育実践研究』 東京都書.

学校をフィールドにした質的研究に関心がある人におすすめ。インタビューはもちろんのこと、さまざまな調査法が具体的な研究事例とともに紹介されている。研究のデザインを考える際に役立ててほしい。

- ③ バック, L., 2014, 『耳を傾ける技術』 (有元健訳) せりか書房.

インタビューという行為そのものについて深く考えたい人におすすめ。著者レス・バックが自身の調査経験を踏まえながら、他者の声に耳を傾けることの難しさや大切さを優しく伝えてくれる。

[参考文献]

バック, L., 2014, 『耳を傾ける技術』 (有元健訳) せりか書房.

貴戸理恵, 2022, 『「生きづらさ」を聴く - 不登校・ひきこもりと当事者研究のエスノグラフィ』 日本評論社.

岸政彦, 2016, 「生活史」岸政彦・石岡丈昇・丸山里美 『質的社会調査の方法 - 他者の合理性の理解社会学』 有斐閣, pp.155-240.

間山広朗・中村瑛仁・伊藤秀樹・小野奈生子・紅林伸幸, 2018, 「教育フィールドワーク研究の到達点 - 理論・調査法・研究知見の観点から」 『教育社会学研究』 103, pp.111-143.

ミルズ, W.C., 2017, 『社会学的想像力』 (伊奈正人・中村好孝訳) 筑摩書房.

野村駿, 2023, 『夢を生きる - バンドマンの社会学』 岩波書店.

O'Reilly, K., 2012, *Ethnographic Methods* (second edition), Routledge.

佐藤郁哉, 2015, 『社会調査の考え方 [下]』 東京大学出版会.

芝野淳一, 2022a, 「グアム育ちの日本人」のエスノグラフィー - 新二世のライフコー

スと日本をめぐる経験』ナカニシヤ出版.

芝野淳一, 2022b, 「社会共創に向けた異文化間教育の展望－『聴くこと』を中心に」
『異文化間教育』55, pp.74-84.

鷺田清一, 2015, 『「聴く」ことの手－臨床哲学試論』筑摩書房.